

仙林寺だより

NO. 72
編集・発行
松田正貴

行事報告

現職研修会

二十二日～二十三日にかけて勉強会に出かけて参りました。会場は天童温泉舞鶴荘、講師は育英短期大学教授で群馬県常仙寺副住職 佐藤達全老師でした。以前からご著書を拜見しておりましたので、内容をより深く学習するにはまたとない機会でした。

『典座教訓』『赴粥飯法』に学ぶ人の生き方』と題する講義は、現代の食事情から始まり、お釈迦様や道元禅師様が『食』そのものをどのように考えておられたか典籍記述に添ってお話して頂きました。ところで、食といえは平成十七年に施行された『食育基本法』にも明らかのように、今や生き物としての基本までも法律によって指示を受けなければ正しい営みが成されない現実があるようです。基本法の第三条には「食育の推進にあたっては、国民の食生活が自然の恩恵の上に成り立っており、また食にかかわる人々の様々な活動に支えられていくことについて、感謝の念や理解が深まるよう配慮されなければならない」とあります。食事を単に空腹を癒すためと考えるのではなく、心を養う大切な営みと受け止めている記述であるうと思えます。これまでの栄養学における考えは、「健康のためは何をどれくらい食べるか」ということに重点が置かれていたということですが、そ

れに対して個食や孤食が問題とされる現代、ようやく「どんな経緯でこの食があるのか、どのように食べるのか、誰と食べるのか」といった「食と心」というところに重要性のポイントが移ってきたと考えられそうです。さて、私たちは食事をいただく前に「いただきます」と声に出します。この言



葉は「すみません
さんいただきます」を
簡略したものだと言
れます。勿論 には、
ご飯を頂けばご飯が、
トマトを食べればト
マトが入るわけで、つ

まりは頂くのちに謝りつつ感謝の心を述べたもの、もっと言えば三度三度の食事の度に命と向き合う営みがあったと理解したものです。この命に真摯に向き合いお悟りといわれる境地にたどり着かれたのがお釈迦様ですが、やはりこの命をどう捉えるか、その気付きの心に力点がおかれます。命の繋がりが、たった一つの命、一度だけ、また限りある命、そして自分以外の命も同じ命を生きている以上お互いをお互いが大切にしよう、仏教は生き方の教えだということが理解頂けるものと思えます。一方道元禅師様のご著書『典座教訓』『赴粥飯法』は、調理や食べ方の作法が事細かに著されますが、実は目的はそれだけではなく「大事な事は全てお台所で学べる」というように、食材や料理する人、また給仕する人、そして一緒に食べる人、それぞれに思いやりの心を持ち、感謝の心を育てる大切な修行として考える事が大切なのだとお伝えに

なっているものでしょう。 仏教では、食事は動物や植物の生命を頂くことだと考えます。食物の中に「こころ」を見れば食物も私達の食べ方を見ていると言われます。食べ方が正しければ、食物は私達の生命を健康に育ててくれますし、正しくなければ私達を病という形で傷つけもします。『唯摩経』というお経の中に「食事を正しく行なうなら、すべての行動も正しい」とあります。「お腹がすいたからただ食べる」という食事から「生かしあっている命を保つ為に頂く」、仏教の視点で食育を真剣に考える時期が確かに来ている、自覚を新たにしたい講習会でした。

掲示板

坐禅堂前の掲示板に仙林寺だよりティクアウト用のホルダーを設置しました。朝の



ウォーキングコース、また桃陵中学校の通学路になっている事もあり、売れ行き？（無料ですが）も順調です。月に一度の頻度で発行している『お便り』です。不特定多

数の読者を想定する事で、筆の走りが滑らかなになったかどうかは微妙ですが、より広い視野で眺めた記事が求められるのかもしれません。フリーペーパーとはいえ緊張感が増します。ただ読者の厳しい批評に耐えられるかどうか甚だ不安ではあります。

ラベンダー無人提供所

山形の農家さんから購入した一株のラベンダーが先祖。さし芽で増やした子孫が今では数十株にもなってお寺の境内を彩ります。ところで、ラベンダーには長雨が天



敵、ちょうど梅雨の時期に開花のときを迎える花は、早めの刈り込み作業をする事で株の寿命を保ちます。果樹農家の桃収穫作業さながらにその時期は一気に訪れます。

旬のものを旬の時期に地元で消費、まさに地産地消？百円なら販売所でしょうか、0円ですので提供所でしょうか。二日間限定でラベンダーの切花をお持ちいただきました。

ひとつと「晴耕雨読」

無常という言葉はご存知と思います。「祇園精舎の鐘の声諸行無常の響きあり」で夙に有名ですが、何となく刹那的な響きとして寂しく感じる方がほとんどでしょうか。

ただ、梅雨のこの季節大自然の様子に目を移してみますと、降り続く雨の中にこれから訪れる夏の暑さに耐えるだけの力を蓄える自然の営みが見えてまいります。この大いなる生命の営み、命の躍動を目にすると、無常の風は必ずしも苦しく悲しい別れのマイナスイメージのみではない事実を感じます。禅師様の言葉に「花は愛惜（あいじやく）に散り草は棄嫌（きけん）に生うるのみなり」とあります。花が咲くときには

歓迎の心をこめて愛でる。そして散れば寂しさの中に哀惜の念を込める。一方「雑草と言ふ名の草はない」と言いながらも、ひいても抜いても生えてくる草には憎々しさを感ずるものなのでしょう。美しい花を咲かせる木々も、またその景観には邪魔者と思えない草々も同じ大自然の命の営みであることに変わりはありません。むしろ私たち人間が持つ愛惜する思い、棄嫌する心こそが「〜であってほしいけど叶わない」という苦しみの原因を生む元である事をお伝えなんでしょう。晴天の中に草を取り、雨天の中に思索をする。梅雨のこの時期、「雑草との戦い」などと物騒な事を言わずに、庭はただ掃くのみ、草は生えれば抜くのみ、そんな心境に何時かはなりたい。

心意

【法句経 四十三】

母も 父も

はた 親族も

たとえいかなる

たすけをなすとも

正しき心もて作せる

さいわいにまされるもの

誰かなしえん

【解説】

中越地震から三年、またしても新潟県が震災にみまわれました。これまで復興に向けて精一杯頑張ってきた皆様のお心を思うと何と申し上げていいかわかりません。不幸にも亡くなられた方々にはお悔やみを、また震災にあわれた方にはお見舞いを申しあげたいと思います。

さて、江戸時代を代表する禅僧良寛さんも西暦一四〇〇年やはり新潟の三条大震災で被災されており、その時残した言葉が「災難に逢ふ時節には、災難に逢ふがよく候。死ぬ時節には、死ぬがよく候。是ハこれ災難をのがるる妙法にて候」というものです。あの良寛さんの言葉かと耳を疑う方もおられる事でしょう。ですが、悲しみに涙するものに対して悔やみや慰めの言葉が何の意味があるのだろうか・・・。

仏教に「同悲、同苦」との言葉があります。この世に涙する者に寄り添い、共に悲しみ、共に苦しみ、共に涙する心で接する以外には慰めはないものなかもしれません。ご自分もまた被災者でありその視点からの言葉ということはありませんが、「災難に・・・。」とは確かに「ただしき心もてなせるさいわい」の言葉であろうと思えます。何ともならない悲しみや苦しみは、乗り越える為の指針というよりは、心に納めるしかない、その納得の道を探る導き手こそが大切なのかもしれません。